

2. 参加者について

表6に第1回研修会参加者の職種・領域と人数を示した。

学校からは校長、教頭、養護教諭、保健体育教諭の参加が得られた。学校長、教頭といった管理職者の参加から学校現場における問題意識の高さが覗えた。地域との連携を考えた場合、生徒指導担当教員やPTA関係者の参加について促していく必要があると考える。

思春期の子どもたちとは直接的な関わりをもたない領域からの参加も多数あった。地域の一員としての問題意識から当該研修会に参加した、との声もあった。また、校区活性化協議会、公民館関係からの参加もあり、幅広い層における問題意識の共有化と互いの存在を認識する場として有益な研修会となった。また、当地域における問題意識の高さがうかがえた。

表7に第2回研修会参加者の職種・領域と人数を示した。

第1回と比較して半数以下の参加者数となったが、複数の領域からバランスの取れた参加による研修会としての体制は維持することができた。参加者が第1回目ほど集まらなかった原因として、1) 情報宣伝・周知の効力低下、2) 研修会の形式変更（講演形式→グループワーク形式）、3) 他の行事、研修会との兼合い、等が挙げられる。

1) 情報宣伝・周知の効力低下については、特に学校領域についてあてはまる。教育委員会、県教育事務所を通じて、各学校長宛に周知・連絡文書を配布したが、学校内での文書回覧、研修会開催の伝達が滞るケースが確認された。第1回研修会においては、学校関係者13名の参加が得られ、また、学校長、教頭といった管理職の参加も見られたことから、学校全体としての包括的な取り組みを行うことに対する意識の高さが覗えたが、継続的な要職者の参加を促す方が必要である。研修会の内容を充実させると共に、取り組みの趣旨に対する賛同を求める努力と、連携構築における主体的な役割を担ってもらうための組織形態づくりが肝要であると考えられる。また、今後の情報伝達のルートとして教育委員会から学校長を経由する“縦”のラインと学校養護部会や生徒指導部会等の“横”のラインとを併用する方法が有効ではないかと考えられる。“縦”のラインにおい

ては学校内での連携強化を、“横”のラインでは意識啓発を促進する効果が期待される。重要な点は各ラインでの情報を同期させるとこと、研修会の開催の内容についてレスポンスを即時的に行うこと、情報伝達のハブとなる機関・担当者との信頼関係を築くこと、である。これらは学校領域だけでなく、他の領域にもあてはまると考えられる。

2) 研修会の形式変更（講演形式→グループワーク形式）については、参加者各自の関わり方と開催周知の内容が関連する。グループワークの場合、主催者側の周到な準備と適切な進行が求められる。本研修会の性格上、複数の領域に渡る参加者構成となるため、各セッションにおけるテーマの設定と進行スタイルの提示に際し、a) 興味・関心の偏らないテーマとすること、b) 専門的な知識がなくても参加できること、c) 具体的な進行スタイルを事前に提示すること、について配慮する必要がある。第2回研修会においては、時間的な制約上、参加人数と参加職種の事前把握が十分に行えなかったことが反省点として挙げられる。また、b) に関して、事前に数件の問い合わせがあったことから、c) と併せて周知方法等に関して検討する必要がある。

表 6. 第1回研修会の参加者の職種と領域

領域	職種	人数
学校保健	養護教諭	8名
	校長	3名
	教頭	1名
	保健体育	1名
医療関係	助産師	6名
	看護師	1名
保健・福祉	保健師	1 2名
	医師	1名
行政	相談員	1名
	教育委員会	2名
法務局	人権擁護委員	1 2名
一般・その他	PTA	2名
	校区活性化協議会	2名
	公民館	1名
合計		5 3名

表 7. 第 2 回研修会の参加者の職種と領域

領域	職種	人数
学校保健	養護教諭	3名
	校長	1名
医療関係	助産師	4名
保健・福祉	保健師	4名
行政	教育委員会	1名
法務局	人権擁護委員	8名
一般・その他	PTA	1名
	一般	1名
合計		23名

3) 他の行事，研修会との兼合いについては，複数の領域にまたがる研修会を実施する際，もっとも考慮すべき点の一つであるが，主催側のみでは調整が難しい。既存の組織との位置づけを明確化すると共に，各領域の取組状況，他事業の実施状況を把握する必要がある。地域コミュニティと連携した包括的な取り組みを実施するためにも，各領域のキーパンの参加とバランスの取れた参加構成を確保する必要がある。

IV. まとめ

今回，田川地域における連携構築を目的とした研修会を開催した。本研究は，研修会開催過程と参加構成を中心に検討した。複数の領域にわたる連携構築研修会における標準化モデルの試みとして，以下の「連携構築研修会の5ヶ条」を本研究のまとめとして提案する。

地域連携構築のための5ヶ条

- I. 地域の特性と既存機関，取組状況の把握
 - ◆ 地域の特性と数値データ
 - ◆ 過去における取組状況
- II. 開催趣旨への賛同と理解
 - ◆ 目的の明瞭化
 - ◆ 既存組織との弁別化
- III. 開催周知・情報伝達ルートの確立
 - ◆ “縦”ラインと“横”ライン
 - ◆ ハブ機関の理解と協力
- IV. 成果の還元と情報の共有
 - ◆ 研修会報告書の作成
 - ◆ 即時的なレスポンス
- V. 参加領域のバランス確保
 - ◆ 専門性と一般化
 - ◆ 参加人数，職種の把握

地域連携構築研修会の評価に関する研究 —第1回 思春期の子どもたちをサポートする連携づくり—

樋口 善之 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
森山 浩司 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
羽入 雪子 日本赤十字秋田短期大学
劔 陽子 産業医科大学公衆衛生学教室
松浦 賢長 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
山縣然太郎 山梨大学大学院医学工学総合研究部保健学Ⅱ講座

思春期の子どもたちをサポートするための連携づくりを目的とした第1回地域連携構築研修会を福岡県田川地域にて開催した。講師として劔陽子氏（産業医科大学公衆衛生学教室）、井上豊治氏（福岡県田川警察署生活安全課少年係長）、身吉三枝子氏（福岡県田川保健福祉環境事務所母子婦人相談員兼家庭自立支援員）を招いた。田川地域から学校保健関係者、地域保健関係者をはじめ、複数の領域にわたる関係機関の賛同を得て、参加者は53名となった。講演に加えて、質疑応答の時間を設け、活発な意見交換の場となった。思春期の子どもたちを取り巻く現状に対する問題意識や各関係機関が連携して問題に取り組むことに対する必要性についての認識が共有される場となった。参加者の多くが研修会の内容に対して高い評価、関心を示した。

I. 目的

福岡県田川市において第1回地域連携構築研修会（テーマ：思春期の子どもたちをサポートする連携づくり）を開催した。目的は、思春期における諸問題への対策推進へ寄与することにある。

II. 開催記録

1. 研修会名：第1回地域連携構築研修会
2. テーマ：思春期の子どもたちをサポートする連携づくり
3. 日時：平成16年2月2日（月）13：30－16：15
4. 場所：田川市中央公民館 講堂
5. 主催：厚生労働省科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）「地域における新しいヘルスケア・コンサルティングに関する研究」研究班（代表 山梨大学医学部保健学Ⅱ講座教授 山縣然太郎）
6. 内容：教育講演「若者の性 ～北九州でのネットワーク～」(講師 産業医科大学公衆衛生学教室 劔陽子)、講演①「田川管内における性非行の現状と課題」(福岡県田川警察署生活安全課少年係長 井上豊治)、講演②「十代の性の現状 ～福祉相談の現場から～」(福岡県田川保健福祉環境事務所 母子婦人相談員兼家庭自立支援員 身吉三枝子)

7. 司会：松浦賢長（福岡県立大学看護学部地域看護学講座 教授）

III. 概要

第1回地域連携構築研修会には田川地域から53名の参加が得られた。学校関係者（校長、教頭、養護教諭、保健体育教諭）、地域保健関係者（市町村、県）、周産期医療関係者（助産師、看護師、医師）、教育行政関係者、家庭児童相談室関係者、人権擁護委員、PTA、校区活性化協議会、青少年育成連絡協議会、等々、各方面からの参加となった。

IV. 講演内容

まず、司会の松浦より、思春期の子どもたちを取り巻く現状は年々悪化しており、心身の健康をサポートする事業の展開には単一の組織による努力だけでなく、関係機関との連携による相談、普及啓発、教育等を行なう必要がある。それらを通して思春期の現状理解と情報の提供を行なっていくことが重要であり、その体制作りを進めいくための研修会であるとのあいさつがあった。

続いて、領域の異なる講師の先生方から具体的な事例を交えた3つの講演が行われ、併せて、質疑応答の時間を設けた。

1. 教育講演

講師： 劔 陽子 先生 産業医科大学公衆衛生学教室

テーマ： 若者の性 ～北九州でのネットワーク～

- 若者が『性』を語る場合
- 「リプロダクティブヘルス・ヘルス（性と生殖に関する健康と権利）」について
- 福岡県北九州近郊地域の若者の性行動・性意識に関する調査結果
 - ・ ・ ・思春期の「性」の現状は東京・大阪などの大都会と私たちの住んでいる地域とでは性行動に関してそれほど大きく変わるものではなく、また、避妊・性感染症に関する意識も低く、危機感も高くない。
- 性に関する「正しい」知識に対するニーズは高い
- 私たちの地域でも何かしなくては → 「女性学・ジェンダー研究ネットワーク」
 - ・ 若者による、若者のための性教育パンフレットの作成
 - ・ ・ ・「YSの会」、産業医大の学生の協力
 - ・ 「高校生と語る！ジェンダーとセクシュアリティ」イベントの企画（ムーブフェスタ2001）
 - ・ 研究者による「高校生のジェンダーとセクシュアリティ」
 - ・ ・ ・「- 自己決定による新しい共生社会のために -」執筆（明石書店）
- 中学校、高等学校と連携した「ピュア・エデュケーション」の取り組み

<中学校>

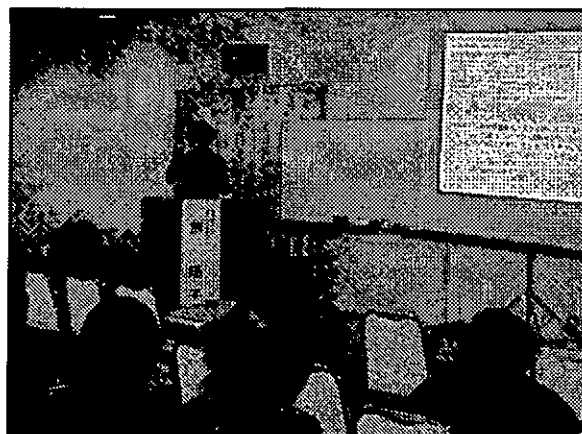
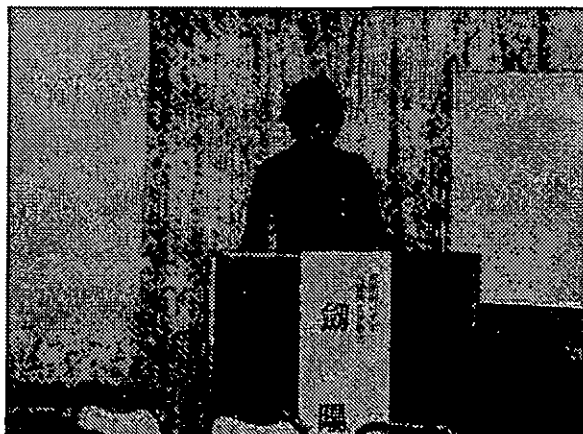
事前に3, 4回打ち合わせの機会を持つ。

中 学 校： 教頭、養護教諭、学年担当者

保健福祉センター： 保健師

地 域： 市民福祉センター職員兼保護者

産 業 医 大： 担当学生、教員

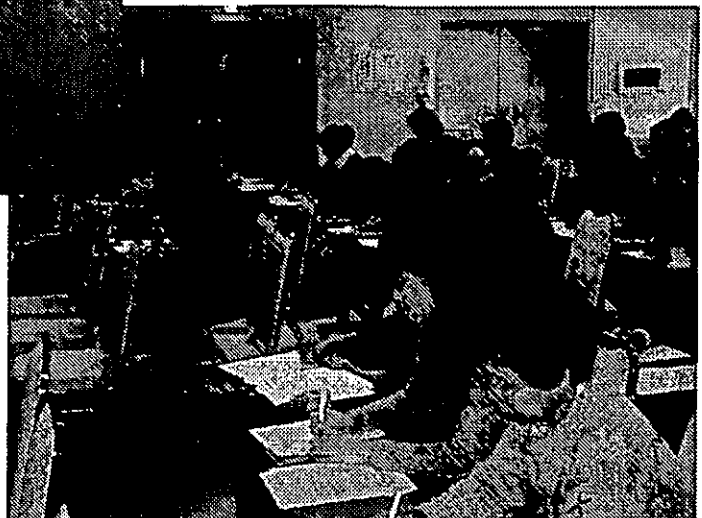


2. 講演①

講師 : 井上豊治 先生 福岡県田川警察署 生活安全課少年係長

テーマ : 田川管内における性非行の現状と課題

- 30年間、少年犯を担当（うち15年間田川地区担当）
- 警察が少年の性非行の実態を知る場合
 - ・・・家出の届出, 少年相談の受理, 街頭補導, 事件捜査
- 福祉犯罪とは
 - ・・・少年であるが故に保護されるべき法益を侵害する犯罪
(子どもを侵害する大人の犯罪)
- 昨年度県内の福祉犯罪725件
(児童福祉法・・・82件, 児童ポルノ法・・・170件, 県条例・・・226件)
被害にあう未成年は, 女子がその多くを占める
- 出会い系サイト, 援助交際, 児童買春
- 田川管内における事例
- 中学生が口にする「カレシ」「カノジョ」という存在
- 性を簡単に捉えていると, (福祉) 犯罪の被害にあいやすい
- 性をめぐる問題には即効薬は存在しない → 家庭での教育が大切である

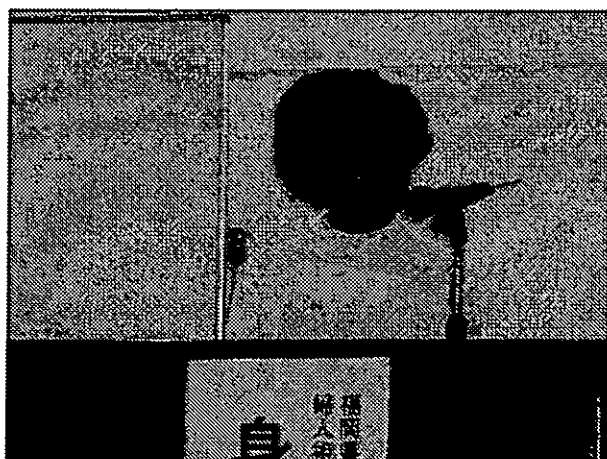


3. 講演②

講師：身吉三枝子 先生 田川市保健福祉環境事務所 母子婦人相談員兼母子家庭自立支援員

テーマ：十代の性の現状 ～福祉相談の現場から～

- 婦人相談員の扱う事例の変化
 - ・・・管理売春にかかわる女性の支援
 - 相談内容の広がり（離婚，DV，十代妊娠，等）
- 十代における望まない妊娠の増加
- 十代の女性から直接相談を受けるのではなく，学校，保健師，助産師，ソーシャルワーカー，民生委員，児童相談所から相談を受ける。
- 直接，女性（女子）に面接を試みてもなかなか事実が明らかにならない場合が多い。
- 今の思春期の子どもたちの行動範囲はとても広い
(九州のみならず，北海道からという事例も)
- 「自分の性を大切にするように」と伝えてもなかなかその場では通じない。また，自分たちが置かれている危険な状況に気づいていない，また，今の子どもたちは安易に「産む」という選択をする。
- 早い時期からの性教育，ジェンダー教育の実施，また，思春期の子どもたちの心身の健康を守るための連携づくりは，常々，必要性を感じる。
- 思春期の子どもたちにとって，1) 望まない性行為にはNOと言えるか，2) 自分の意思をきちんと伝えられる関係を作る，3) 暴力が関与した関係ではないか，4) リスクの伴わない関係であるか，等が大切
- マスメディアからの影響は少なくなく，また，大人自身の生き方が問われている。



4. 質疑応答

Q. 「援助交際を取り締まる法律はないのか」



A. 「援助交際とはマスコミによる造語であり、実態は売買春である。既存の売春防止法では、売買春の当事者を処罰する規定がないため、未成年の場合、“真犯”として指導するケースがある。」

Q. 「ピュア・エデュケーションという考え方について教えて欲しい」



A. 「ピュア・エデュケーションとは方法論の一つであり、仲間内での教育・学習活動、ジェネレーションギャップの存在が目的達成のための困難な障害となる場合に有効。友達同士の情報のやり取りの中へ適切な情報・知識を入れていくことにより、教育的な効果が期待できる。」

Q. 「連携した取り組みを阻害する要因を挙げるとしたらどのようなものがあるか」



A. 「事業を行う際の資金面での継続性、中心となる機関（キーとなる人）のバーンアウトの問題が挙げられる」



VI. 参加者の感想

図1に参加者による研修会の評価を示す。いずれも5段階評価（5…よい、1…よくない）で、「研修会の資料内容はよかったか」、「講演内容はよかったか」、「内容は理解できたか」、「テーマに対して興味をもてたか」、「新しい知識を得ることができたか」、「自分の業務に役立つと思うか」について評価を得た。

資料内容を除く設問では4、5の回答が多くみられた。講演内容・テーマへの興味については40%以上のものが「5. よかった」と評価していた。一方、資料内容については、「1」「2」の評価が22.7%あった。レジュメや講演に用いられたスライドを配布する、資料には参加者に合わせたフォントサイズを用いる、などの配慮が望まれる。図2に「今後も本研修会に継続して参加していきたいと思いませんか」に対する回答を示した。90%以上の者が継続的な参加を希望した。

表1に研修会への感想を示した。

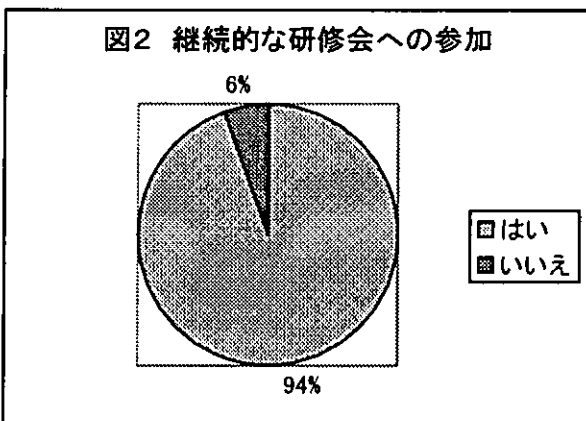
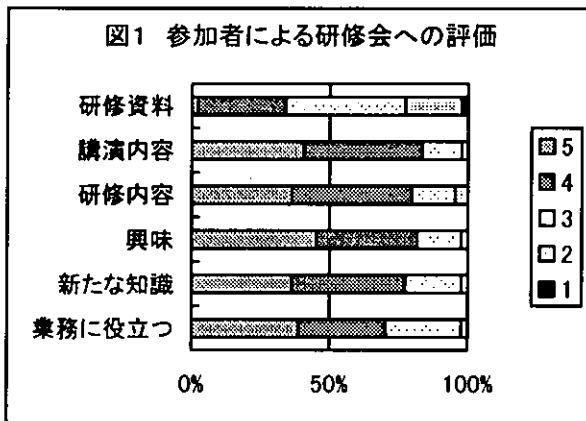


表 8 参加者の研修会に対する感想

- 1 性教育のこれからの進め方を検討する余地が多いにあると思う。
- 2 今後も定期的な開催を希望する。

- 3 子ども達を預かる学校側の立場からの意見も伺いたい。
- 4 ピュア・エデュケーションを本校でも実施したい。
- 5 子供たちを取り巻く環境は厳しく、保護者に対して過大な期待はできない、その中では家庭・地域・学校等の連携は難しいと感じる。
- 6 様々な立場からの意見が伺えてよい場となった。
- 7 早期（小学校低学年）からの性教育が及ぼす客観的なデータなどはないのでしょうか。
- 8 学校現場での性教育の実情を知りたい。
- 9 十代妊娠に関するデータを見たい。
- 10 問題意識の共有化には大変有意義な会であった。
- 11 直接は思春期の子供たちに関わる機会は少ないが、『連携』というキーワードから自分としての大変良い勉強になった。
- 12 性犯罪等に関わる者の認識を疑う機会となった。また、自他共にその存在を大切にしたいという関係とはどのような関係であるのかについて、人権と連携して考えていく必要がある。
- 13 “若者による若者のための”性教育パンフレット作成、現場での性教育の必要を感じた。
- 14 地域の諸問題に関わる人たちにとって、このままではいけないという思いは強い。自分の子どもも健全化環境の中で育てたいという思いを持っている。今の田川の現状は田川独特のものなのか、それとも全国的にも同じような現状が見られるのか、知りたい。
- 15 初めての試みで大変興味深く参加できた。
- 16 連携の必要性を改めて感じた。
- 17 具体的にどのような「連携」としていくのが課題。
- 18 もっと多くの人に参加して欲しい。
- 19 （性犯罪事件が公になった場合）被害者の人権がきちんと擁護されているか気になる点が多い。被害者の人権を守るとする意識は通り一遍の捉え方でなされているようでとても気になる。
- 20 十代を取り巻く性の現状の厳しい現実をつきつけられたと感じた。
- 21 非常に現実的な問題かつ重要な問題であるので地域に拡げていく必要性を感じる。家の中での嫉だけでは片付かない大きな問題である

VI. まとめ

田川地域の各機関から53名のおよぶ多くの参加者が得られた。また、内容に関しても高い評価が得られた。異なる立場から思春期に関わる互いの存在を認識し、幅広い層における問題意識の共有化を行なうことができた。

若者の性

—北九州市でのネットワーク—

産業医大 公衆衛生
劔 陽子

ytsurugi@med.uoeh-u.ac.jp

1

リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (性と生殖に関する健康と権利)

リプロダクティブ・ヘルス/ライツ

人びとは皆、その生殖の過程が、身体的・精神的・社会的に良好である権利を持つ。

年齢・性別などを問わず、すべての人にリプロ・ヘルス/ライツが確立されるべきであり、自分のセクシュアリティに積極的にかつ責任を持って対処できるよう、リプロ・ヘルスに関する情報やサービス提供を受ける権利を有することが認められている。

2

具体的には・・・

- 安全な妊娠・出産ができること
- 健全な子育てができること
- 産む・産まない・いつ産むかなどを決められること
- 安全なセックスができること、楽しめること
- 様々なセクシュアリティが認められること etc

3

当然、若者も例外ではなく、 リプロダクティブ・ライツ (権利) を持つ。

じゃあ、若者の性と生殖は健康??

性感染症は若者に流行ってる・・・
10代の人工妊娠中絶が増えている・・・
産婦人科や泌尿器科って行きにくいな・・・
病院に行ったら、親にばれちゃう・・・
検査してみたいけど、お金がない・・・
いろんなことを知りたいけど、知る機会がない・・・

あんまり健康とは
言えないかも

4

当然、若者も例外ではなく、リプロダクティブ・ライツを有する。

日本の若者はリプロライツを 行使しきれていない!

若者は概して収入が少ないこと(経済的弱者)や、若者のセクシュアリティがタブー視されやすいことなどにより、若者のリプロヘルスは損なわれやすい。若者は性感染症罹患に関してハイリスクな集団である。

5

若者のリプロ・ヘルスを守るための 身近な活動



若者の性と生殖に関する健康と権利を守るための活動

6

福岡県北九州近郊地域の若者の性行動・性意識

市立男女共同参画センター・ムーブ 平成12年度女性問題調査研究支援事業として平成12,13年度に県内において自記式質問紙調査を実施した。

中学校 4校、387人
 全日制高校6校、2,956人
 定時制高校5校、437人
 大学 3校、908人

が回答した。

7

性交経験

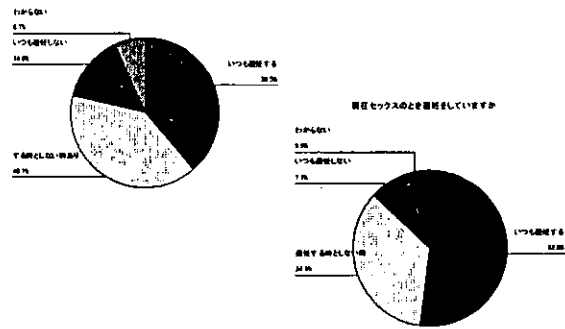
- 性交経験のある者
 - 全日制高校生 33.9%
 - 定時制高校生 62.2%
 - 大学生 61.2%

中学生の20.6%が
 「好きな人がいたら、性交したいと思う」

8

全日制高校生

図2 現在避妊をしていますか



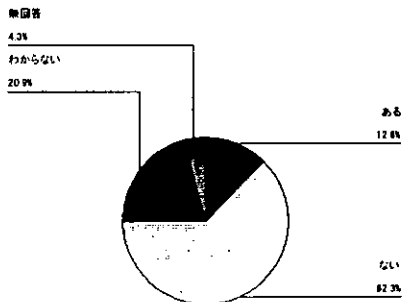
北九州市大学生

性感染症に気をつけていますか

- 「気をつけている」と答えた者
 - 全日制高校生 57.2%
 - 定時制高校生 56.6%
 - 大学生 62%

10

今までに性感染症にかかる危険があったと思いますか



北九州市内の大学生へのアンケートから

表1 コンドームについて 正答率

	全体(%)	男子(%)	女子(%)
避妊法の中で最も避妊効果が高い(正解×)	34.8	32	38.7
性感染症を防ぐ効果もある(正解○)	90.0	92	87.3
男性用と女性用がある(正解○)	50.5	51.0	49.8
射精の時だけ装着すればよく、最初から装着する必要はない(正解×)	84.7	85.4	83.8
薬局で買える(正解○)	95.0	93.7	96.8

表2 ビルについて 正答率

	全体(%)	男子(%)	女子(%)
経口避妊薬である(正解○)	89.7	89.3	90.2
性感染症を防ぐ効果もある(正解×)	78.1	77.5	78.6
薬で買える(正解×)	45.4	44.3	53.7
副作用がある(正解○)	80.6	80.5	80.8
服用すると、将来にわたって妊娠しにくくなる(正解×)	45.8	41.9	51.0

- 最も一般的なコンドームについても、その避妊効果などについて、誤解がある。
- ビルについては、副作用の面ばかりが強調されて、正確な情報が行き渡っていない。
- 妊娠を自分の問題として考えていない。

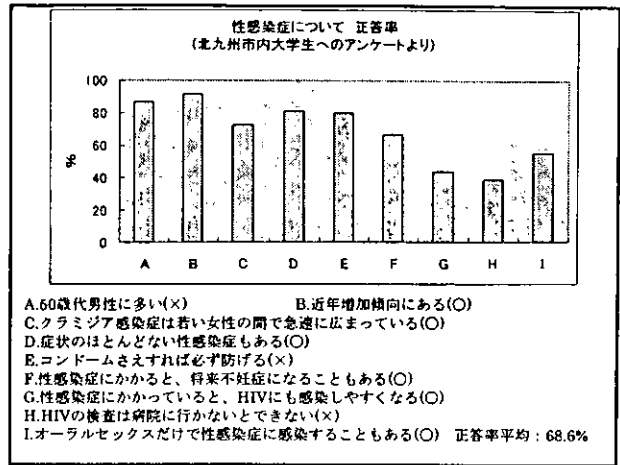
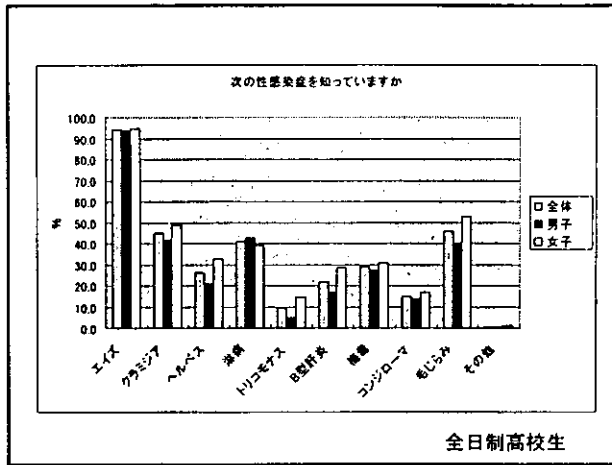
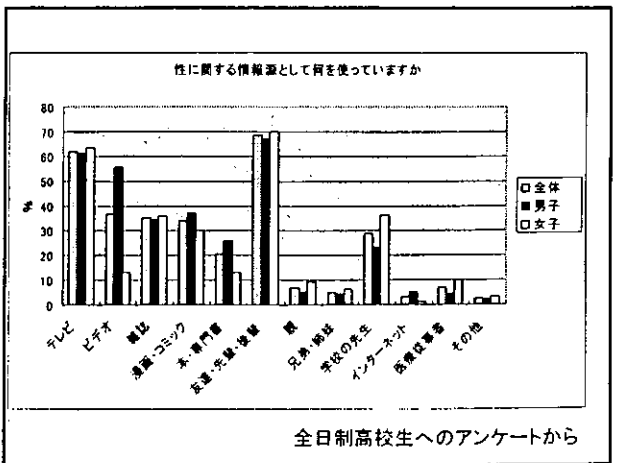
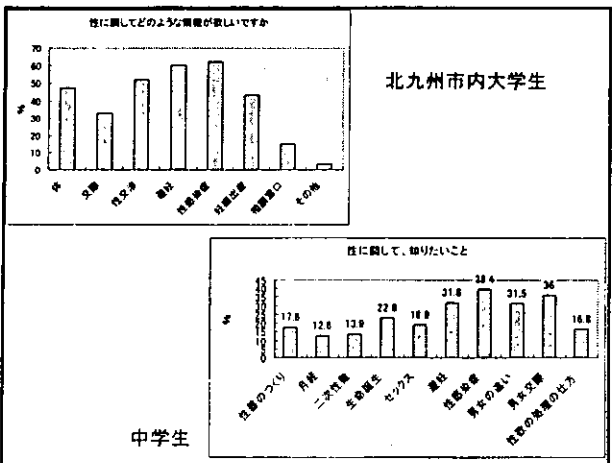
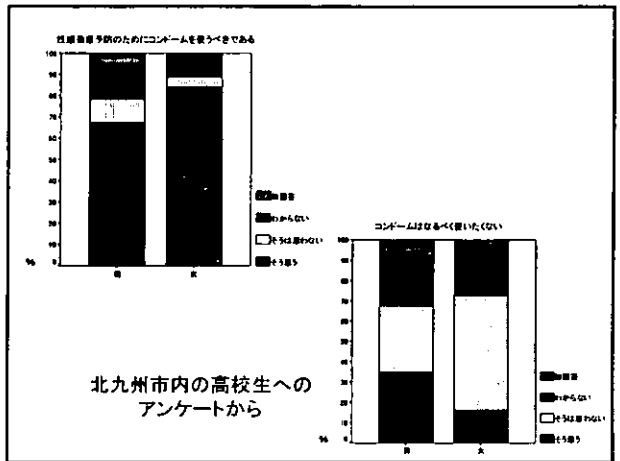


表3 性感染症について 正答率

	全体(%)	男子(%)	女子(%)
感染者は50歳代男性に多い(正解×)	81.3	90.3	92.5
近年増加傾向にある(正解○)	81.9	90.7	93.4
クラミジア感染症は、若い女性の間で急速に広がっている(正解○)	75.1	71.9	79.4
症状のほとんどない性感染症もある(正解○)	75.5	71.3	80.8
コンドームさえすれば、必ず防げる(正解×)	75.7	72.8	79.4
性感染症にかかると、将来不妊症になることがある(正解○)	68.2	66.4	70.4
性感染症にかかっていると、HIVにも感染しやすくなる(正解○)	65.6	66.1	65.0
HIVの検査は、病院に行かないとできない(正解×)	24.4	25.5	23.2
オールセックスだけで、性感染症に感染することがある(正解○)	50.0	52.0	47.6

(全日制高校生)

- ・エイズ以外の性感染症はあまり知られていない。
- ・なんとなくは知っていても詳しくは知らない。
- ・特にHIVの検査が無料・匿名で、保健所などでもできることやオールセックスだけでも感染することがあることなどは、あまり知られていない。
- ・自分の問題としては考えていない。



調査の反響

- 「地元」のデータへの関心
- 「自分たちの問題」…危機感
- 「何かしなくては…」
…行動を起こすきっかけに

19

女性学・ジェンダー研究ネットワークのAction!



- ・若者による、若者のための性教育パンフレットの作成
……「YSの会」、産業医大の学生の協力
- ・「高校生と語る!ジェンダーとセクシュアリティ」イベントの企画(ムーブフェスタ2001)
- ・研究者による「高校生のジェンダーとセクシュアリティ
—自己決定による新しい共生社会のために—」執筆
(明石書店)

YSの会のAction!

「まじめにエッチトーク」
At ムーブフェスタ



女性学・ジェンダー研究ネットワークのAction!
平成14年北九州市世界エイズデーイベント
でのピア・エデュケーション

県男女共同参画センター



県男女共同参画センター・あすばる
平成14年度調査研究支援事業
として

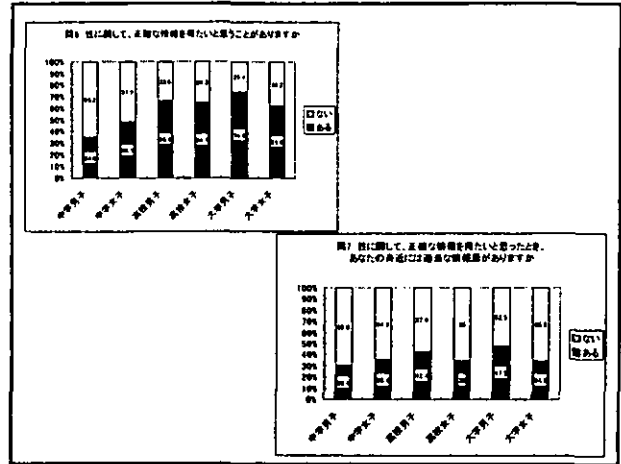
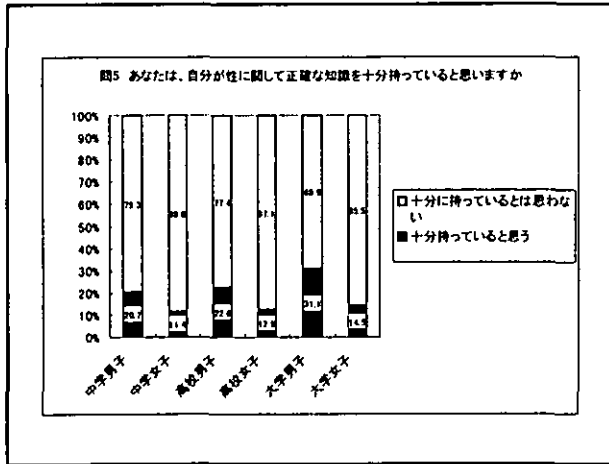
- ・若者による、若者のための
性教育パンフレットの作成
……「YSの会」

産業医大の学生 の協力

調査研究の流れ

- 中・高・大学生を対象としたニーズ調査
(アンケート調査)
- 教育ツールとしてのパンフレットの作成
- 中・高・大学生によるパンフレットの評価
(アンケート及びフォーカスグループインタビュー調査)

24



ニーズ調査: アンケート

- 性の情報源は「友達・先輩・後輩」「テレビ」「雑誌」
- 性に関して、正確な知識を十分に持っていると感じている者は少なく、正確な情報を得たいと思うことがある者も多い。しかし得たいと思っても、適当な情報源がない。
- 情報源として、漫画、パンフレット、ビデオ、TVや雑誌の特集などのニーズが高い。
- 知りたい情報は、全般的、性感染症・エイズ、妊娠・出産・避妊、男女交際、性交についてなど。

27

パンフレットの作成

ニーズ調査の結果より、

- 全体的(特に性感染症について詳しく)な内容
- テーマごとに書かれたもの
- イラスト中心
- 薄いもの

を作成することと決定。
中学生と高校生・大学生では少しニーズが異なる傾向が認められたため、2種類作成することとした。

28

パンフレットの作成

- リプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点
—すべての人の自己決定の尊重
- 参加型
—自分の問題として考える
- ピア・エデュケーション効果
—若者から若者へのメッセージ

29

評価調査: アンケート

- 「読みにくい」「読まなかった」と答えたものは1割程度。
- 8割以上が「情報量はちょうどよい」、「とても/大理解できた」
- 7割程度が、「求めている内容だった」
- 約半数が「参加した」
- 7割以上が「自分の性を自分なりに考えた」
- 約9割がパンフは「役に立つと思う」
- 学校・病院・保健室などにあれば手にとりやすい

30

評価調査:アンケート

<反省点>

- 中学生男子にはわかりにくい内容
- 性同一性障害・同性愛の項目には興味もたれにくい

31

評価調査:フォーカスグループインタビューで述べられた若者の望む対策

- 少人数で、気軽な雰囲気がいい!
- 包み隠さず、率直に話して欲しい!
- メディアで、性のこともわかりやすく教えてくれたらいい!
- 学校の性教育を充実させて欲しい!
学校や親は話しにくい。学校外で何かあったらいい!
- 共感しやすい!ピア・エデュケーション

32

産業医大医学部公衆衛生学実習でのピア・エデュケーションへの取り組み

4年次の公衆衛生学実習で「母子保健」「健康教育」をテーマに選んだ班が二班合同で、中学校、高校で性をテーマにピア・エデュケーションを行っている。

<エデュケーター養成>

- 産婦人科・泌尿器科などの講義で基礎的な医学的知識を身につける。
- 公衆衛生の講義の中で、リプロ・ヘルス/ライツについて、ヘルスプロモーションについてなどを学ぶ。
- 企画の準備を通じて、自分たちで学んでいく。

33



産業医大医学部公衆衛生学実習でのピア・エデュケーションへの取り組み

- 学校との連携

<中学校>

事前に3, 4回打ち合わせの機会を持つ。

中学校: 教頭、養護教諭、学年担当者

保健福祉センター: 保健師

地域: 市民福祉センター職員兼保護者

産業医大: 担当学生、教員

* 学校全体の行事としての位置づけ

35

産業医大医学部公衆衛生学実習でのピア・エデュケーションへの取り組み

- 学校からのフォロー

何か問題が起これば、後で学校側がフォローする体制

- 地域へのフィードバック

保護者便り、市民福祉センター便りでの紹介

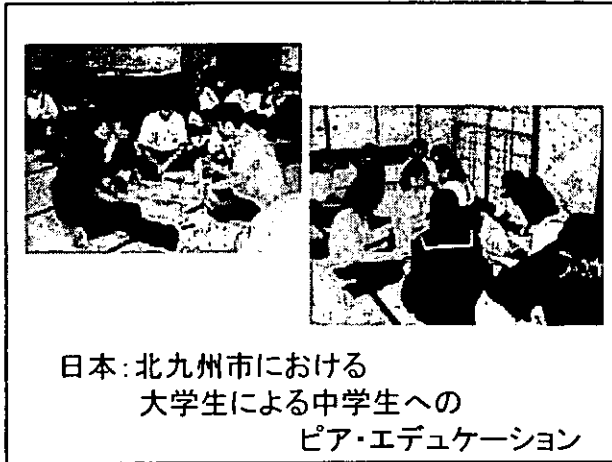
- 産業医大からのフィードバック

事後に学校側へ、生徒の反応などを報告。アンケート結果、写真、ビデオ、大学生のレポートなどの提出

3年生からも希望者が出る。

⇒ 3年次には夏休み前に希望者のみを対象として再度ピアを実施。

36



日本:北九州市における
大学生による中学生への
ピア・エデュケーション



☀ ロールフレイ ☀

☀ 異性のカラダ
異性のココロ ☀



日本:北九州市における大学生による高校生への
ピア・エデュケーション



☀ 性感染症ってどうやって
うつるの?? ☀

☀ コンドームちゃんと
使えますか? ☀

中学生・高校生の感想

- グループになって話をしたのは、全員でするよりも発言しやすく、気軽な気持ちになった。また友達の気持ちや考えていることを聴くことができ、楽しく勉強できた。
- はっきりと恥ずかしがらずに話をしてくれて、とても嬉しかった。
- なぜ大学へ行ったのか、大学生活のことなどについても聞きたかった。

41

大学生(カウンセラー)の感想

- 自分たちも普段性について話をすることはあまりなく、人の考えていることに驚くこともあった。
- 自分たちもいい勉強になった。
- 自信がついた。

42



ピア・アプローチの効果



- 受け手への効果
 - 健康を脅かすリスクから身を守ろうとする方法を取得できる。情報を得られる。相談できる。自尊感情の獲得。
- 行う側への効果
 - リーダーシップスキルを養う。コミュニケーション能力を養う。自己効力感、自尊感情の獲得。
- 地域や学校への効果
 - 地域の関心を呼び、連携が取れる。情報源へのアクセスがよくなる。

(Goldsmithら)

43

ピア・エデュケーションは

若者
 地域（保護者・行政）
 学校
 専門家 etc.



が協力し合わないと、うまくいかない。
 是非、組織だったピア・エデュケーション
 活動の実施をお願いします！！



若者のリプロ・ヘルス/ライツを守るために一提言

- 情報を得やすい環境の整備
 - 学校やマス・メディアへの期待、地域の情報の提供
- 少人数で、堅苦しくない性教育
 - 早急な指導者の養成が必要
- 若者のエンパワーメント
 - 大人の役割は若者に自分たちの能力を「気づかせる」こと。
自分たちの問題を自分たちで解決しようとする若者たちをサポートする。
- 大人が、性へのタブー感を減じること
 - 若者と話すために、大人も自分の性について語れるようになる。

45

地域連携構築研修会の評価に関する研究

—第2回 語ろう！思春期の子どもたちのサポート「情報交換セッションと連携構築」—

樋口 善之 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
羽入 雪子 日本赤十字秋田短期大学
松浦 賢長 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
山縣然太朗 山梨大学大学院医学工学総合研究部保健学Ⅱ講座

思春期の子どもたちをサポートするための連携づくりを目的とした第2回地域連携構築研修会を開催した。学校保健関係者、地域保健関係者、周産期医療関係者、教育行政関係者、人権擁護委員、PTA等々から23名の参加が得られた。今回の研修会は、思春期保健に関する解説とグループワーク形式によるセッションにより構成された。松浦賢長（福岡県立大学看護学部地域看護学講座教授）より「テーマ：思春期における性の見方、新しい対策」とした思春期保健に関する解説があり、グループワーク「テーマ：思春期の子どもたちにおける性の問題とは何か」を行った後、思春期の性に関する諸問題の整理とその対応について参加者全体で話し合った。参加者の多くが研修内容に対し、高い評価を示した。

I. 目的

福岡県田川市において第2回地域連携構築研修会（テーマ：語ろう！思春期の子どもたちのサポート「情報交換セッションと連携構築」）を開催した。目的は、思春期における諸問題への対策、推進へ寄与することである。

II. 開催記録

1. 研修会名：第2回地域連携構築研修会
2. テーマ：語ろう！思春期の子どもたちのサポート「情報交換セッションと連携構築」
3. 日時：平成16年2月23日（月）13：30～16：15
4. 場所：田川市中央公民館 集会室
5. 主催：厚生労働省科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）「地域における新しいヘルスケア・コンサルティングに関する研究」研究班（代表 山梨大学医学部保健学Ⅱ講座教授 山縣然太朗）
6. 内容：解説「思春期における性の見方、新しい対策」（講師 福岡県立大学看護学部地域看護学講座教授 松浦賢長）、グループワーク「思春期の子どもたちにおける性の問題は何か」
7. 進行：松浦賢長（福岡県立大学看護学部地域看護学講座 教授）

III. 概要

第2回地域連携構築研修会には田川地域から23名の参加が得られた。学校保健関係者（校長、養護教諭）、地域保健関係者、周産期医療関係者、教育行政関係者、人権擁護委員、PTA、等々、各方面からの参加となった。今回の研修会のグループワークのテーマとして（1）自分たちの知りえる子どもたちの状況とその把握方法、（2）自分たちの組織、機関内での取り組みと連携状況、（3）自分たちが効果的な取り組みを行う際、必要となる情報や協力体制、について検討することとしたが、参加人数、進行上の都合より、グループワークのテーマを「思春期の子どもたちにおける性の問題は何か」と変更した。テーマに対して、各グループから発表された内容について、問題点の整理とその対応について参加者全体で話し合った。

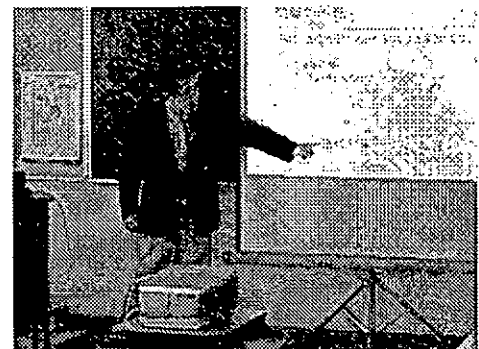
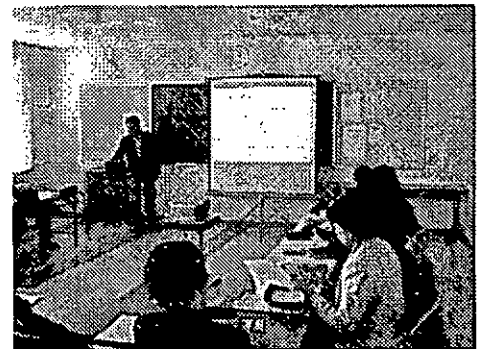
IV. 解説

1. 解説内容

講師 : 松浦賢長 (福岡県立大学看護学部地域看護学講座教授)

テーマ : 思春期における性の方見方, 新しい対策

- 思春期の性に関わる問題の所在について
 - 高等学校における現状について〔東鷹高校 米光養護教諭(定時制), 松野先生(全日制)〕
 - 若者の恋愛に対する態度(交際相手が短期間のうちに変わる)→違和感
 - 「産む」or「産まない」は個人の選択であるが, 妊娠すると安易に出産してしまうという場合のみられる。
- 性教育に関する現状と課題 (自己抑制教育, リスク教育, 環境コントロール)
 - 努力しているが, 数値的な効果があがっていない
 - 環境は悪化している→適切な環境にしていく必要がある
 - 性教育の目的は何か
 - ヒトの性行動を相手にしていることが忘れられていないか?
→環境・性情報によって性行動は変化する。
 - 性教育と道徳教育について
 - 性教育は確率の問題
→十代の妊娠・中絶をゼロにするためには
 - 学校における教育だけでは, 子どもたち自身にコントロールさせ, 判断させることに限界があるので
→思春期の性行動は, 周囲の環境の協力, 連携がなければ効果があがらない
 - 性感染症の問題: 根拠のない安易な判断→リスク教育の必要性
 - 自己抑制教育, リスク教育, 環境コントロールが大切
- 現在効果があるといわれる対策 (性行動を慎重にさせる 初交年齢を上げる, など)
 - 環境をコントロールした上で(必須), 低リスクに誘導する。
→環境コントロールには周囲の協力・連携が必要
 - コミュニケーション
 - ◇ 親子の会話
 - ◇ 異世代交流・ボランティア活動
 - 十代の中絶を減らすためには
 - ◇ 経口避妊薬(ピル)
 - 子どもの性に絡む犯罪を減らすには
 - ◇ 性を安易に考えさせない
 - ◇ 地域の人々が子どもたちを観る目が大切
 - 取り組みの目的の明瞭化と評価
 - エビデンスに基づいたプログラムの実行
 - 「政治」との問題
 - 性行動・生殖行動をターゲットに行なうことが重要



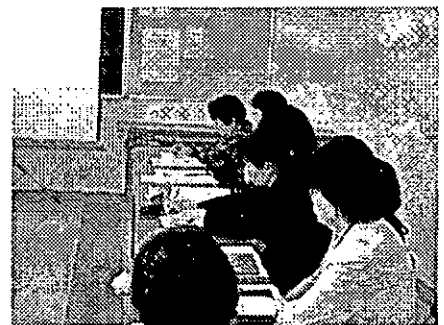
2. 質疑応答

- Q. 親子の会話において、具体的にはどのような関わり合いがよいのか。
- A. 性に関しては「何でも話すのがよい」のではなく、「話さない」ことも重要です。無理をして「性の話」をする必要はありません。
- Q. 親子において、性に関する話を「しないのがよい」のではなく、「敢えてしなくてもよい」と理解しているが。
- A. まったくその通りです。
- Q. 「政治」とはどのような関係があるのか
- A. 科学的に正しい情報に基づく性教育パンフレットの作成・配布に関して、国会においても議論がなされた事もあるほどの性教育は政治的な関心事になっています。
- Q. 日本は性に関して閉鎖的なのか。
- A. 世界的にみると、日本は性に対して開放的であるといえます。未成年がポルノに接する機会は欧米に比較して非常に多いことからそのことはいえる。(コンビニエンスストア、文学的な表現など)
- Q. 『いのち』を大切にすることは、道徳教育でもあり、人権教育とも言えるのではないか。
- A. 「人権」とは、対国家概念であり、個人間における『いのち』の大切さを伝える場合には、「人権教育」というよりも「道徳教育」といったほうが適切だと思います。一方、リプロダクティブ・ヘルツに関する国家的な介入に対しては、「人権」としての立場が必要になってきます。
- Q. 人権教育、性教育、道徳教育との違いは？
- A. 人間形成、人格形成は道徳教育の範疇である。道徳教育は国語や理科などとは異なり、学校教育の中では特別な教科である。「いのちの大切さ」などを扱う場合には道徳教育といえます。「何か」を大切にすることを教える教育＝道徳教育であると整理することができるのではないのでしょうか。性対策をはじめとする性教育(セックス・エデュケーション)は、道徳教育とは異なるということです。

3. フロアからの意見

周囲の協力がなければ、現在の性教育は立ち行かない、ということが言える。学校だけで「知識」を教えても、地域・家庭において同様のスタンスが取られていなければ、効果があがらない。また、学校にはしなければならないことがどんどん増えている現状を考えると、学校現場における自助努力だけでなく、他の機関・地域との連携が欠かせないのではないか。

性の問題だけ異に関わらず、思春期における諸問題に対して、子どもたち自身に適切な判断をさせる事が望ましいが、そのためにも、周囲の連携したサポートが欠かせない。問題を細分化して考えるよりも包括的な取り組みを行なった方が取り組む側としてはやり易い。様々な問題の根底に横たわる要因はそれほど変わらず、子どもたちがよき人間、よき社会人、よき親になるための教育が大切である。(中学校長)



4. 質問のあった用語

エビデンス・・・(客観的な)証拠

自己抑制・・・自分の欲求をコントロールすること

生物学的・・・人間を社会的存在として捉えるのではなく、生物として捉えること。

「個人の考えに関わらず、生殖を行ない、種を残していく」という考え方。

リスク・・・確率

V. グループワーク

1. テーマ：思春期の子どもたちにおける性の問題とは何か

Aグループより、

1. 妊娠・中絶・感染症が増加
2. 不特定多数との交際
3. 性教育のやり方がわからない
4. 安易に出産を選択する
5. 出産後のサポート体制が乏しい
6. 育児放棄に結びつく
7. 体の変化について、伝え方が難しい
8. 家庭のあり方が問われている。
無関心・価値観の伝達
9. 性情報・雑誌の氾濫
10. 彼氏がいることがファッション
11. 福祉犯罪に巻き込まれるような
家庭環境の改善

Bグループより、

1. 性知識が適切ではない
2. 性衝動をコントロールしがたい
3. 彼に嫌われるのがコワイ
4. トラブルに至るまでの相談窓口が少ない
5. トラブル後の相談窓口も少ない
(養護教諭には話しやすい)
6. 親子関係ができていない
7. 親が子どもを愛する仕方がなっていない
8. 学校のカリキュラムが後追いである。
9. (性・福祉)事件の正確な情報が流れにくい
10. 書店等への立ち入り調査をやっている
11. 自己実現できる分野が乏しい

問題・課題マップ

